

今、子どもにとどく言葉とは

穴倉さとし

わが家のフランスに住む外孫兄弟が帰省して滞在中。三

歳の兄は大人の言葉をほとんど理解し、毎晩寝る前には必ず私たちの寝室にやってきて「おやすみのビズするね」と頬にチュッをしてから床に就く。その兄もママから「手を洗いなさい」「歯をみがきなさい」と言われると「やだ」、繰り返し言われると「やだ、やだ、やだ」とテンションがあがってくる。生後九カ月の弟をいじめているとき「だめ」と言われると「だーめ」と言い返しやめない。子どもって「だめ」と言われると、言ってみたくなくなったり、そのときの大人の反応を楽しんでいるところがあったり、なので、逆に大人がいっしょに楽しんでしまっていると、それほど重症化しないと思います。との識者の言葉が脳裏をよぎる回数が増えている。

試しに小野ルミ氏の「ヤダくん」の詩を読み聞かせてみる。「べんきょう おつかい はやおきも」のところは「てあらい はみがき おかたづけ」と言い変えて(半分かけたお月さま)かど創房)。

ヤダくん やだやだ いやだ やだ

べんきょう おつかい はやおきも

やだやだ やだやだ まっぴらだ

やだやだ ヤダくん あまのじゃく(二・三・四連略)

「ぼくはヤダくんかな?」「ちがう!ルカくんです。ジイジはヤダくんかな?」とオームがえしに逆襲されてぎゃふん。発達心理学者の岡本夏木氏によれば、子どもの成長には個人差はあるものの、自由に歩き回れるようになり、言葉がどんどん増えていくのは満二歳前後くらいからだが、この時期には大人も常に工夫して言葉を選ぶことが必要である。大人の世界の都合で子どもを振り回すようなことはやめるべきと警告している。

私見だが幼児期の子どもに「だめ」「いけません」の言葉は反発されることが多く、「……してみよう」「だいじょうぶ」など子どもの肯定感を促す言葉こそ心にひびく大切な言葉ではなからうかと考えている。孫がもう少し成長したら石井久美子氏の詩「だいじょうぶ」や、こやま峰子氏の詩「はじめの いっぱ」を読み聞かせたいと思っている。幼児期の子どもはさておき、アングルを変えて小学生に